+W 共に生きる

不登校の子どもら集う

「第三の居場所」広がる

不登校の子どもらが安心して過ごすための「第三の居場所」が増えている。社会や他者と交わるきっかけの場として、学校とも家庭とも異なる役割が期待される第三の居場所とはどんな場所なのか。宮城県内で活動する三つの団体を取材した。

（柏葉竜、菊地弘志）

台市宮城野区

宮城県内の3団体

■「ここにいていい」

9月下旬の夕暮れ時。木造2階の施設で子どもたちが宿題をしたり、スマートフォンを眺めたりと思い思いに過ごしていた。

岩沼市の「子ども第三の居場所　いわぬまきち」。日本財団（東京）の助成を受け、NPO法人アスイク（仙台市）が4月に開設した。20～50代のスタッフ4人が常駐し、市内の小学3年～中学2年の7人が利用する。

第三の居場所はフリースクールの一種とも言えるが、明確な定義はない。不登校が低年齢化し、学習重視よりも、子どもを孤立させないための居場所とされる。いわぬまきちには不登校の子もいれば、家庭の事情で放課後に通う子もいる。ゲームをしてもいいし、スタッフらとおしゃべりをしてもいい。

利用は平日午後2～8時で無料。内向的でコミュニケーションを取るのが苦手な子どもが多く、スタッフの堀内孝雄さん（42）は「何かをしなければいけない場ではない。子どもたちが安心して過ごし、『ここにいていいんだ』と思える場所にしたい」と話す。

夕食も提供し、準備や片付け、食後の歯磨きなどは子どもたちと一緒にする。「人との関わりに慣れ、生活リズムを整えてほしい」と堀内さん。本音や困り事を周囲に伝えられるようになったり、不登校だったのが再び学校に通い始めたりする子もいるという。

■図画工作取り入れ

仙台市のNPO法人「アートワークショップすんぷちょ」が運営する「かようはらのまち」は火曜の午前10時～午後3時半、宮城野区原町の「アートシエアスタジオちゃちゃちゃ」で開かれる。昨年7月に始まり、18歳以下なら誰でも通える。原則無料。

すんぷちょは芸術を通した交流目的のワークショップや舞台公演を行い、第三の居場所づくりでも図画工作を取り入れる。代表の及川多香子さん（39）は「場づくりにアートの力は大きい。正解のないアートは柔軟性や懐の深さを発揮できる」と語る。

ただ無理強いはしない。9月下旬、元小学校教諭でスタッフの美術作家土屋聡さん（58）が木材を使ってビー玉を転がすおもちゃを作っていると、子どもが興味深げに寄ってきた。「成り行きに委ねるようにしている」と土屋さん。ここでの活動が何かに関心を持つきっかけになればいいと考える。

社会や他者と交わる安心の場

できる範囲で手伝いながら食卓を囲む「クローバー」の昼食＝仙台市若林区

■保護者の救いにも

子どもだけでなく、親も支える場所を目指すのが2020年に発足した仙台市の任意団体「親子の居場所クローバー」だ。

若林区荒井にある借家で21年10月に事業を開始した。利用は火、木曜の午前10時半～午後4時で、1家族1回500円。小中学生を中心に10人ほどが伸び伸び過ごす傍らで、同じ悩みを持つ保護者同士が語り合う場になっている。

代表の遠藤さち子さん（42）自身、小学6年の長女と3年の次女が不登校になり、ホームスクール（在宅教育）を選んだ。「親も余裕を失いがちだ。親にとっても救いになる場が必要だった」と振り返る。

第三の居場所事業を行う団体は増えてはいるが、財政的な基盤が弱くボランティアスタッフに頼る団体は少なくない。すんぷちょの及川さんは「子どもたちが抱える事情はさまざまで、事業を継続することが大切だ。行政支援などがより整えばありがたい」と望む。

が家庭や学校で広がった。新型コ

第二十

姫路を出

兵庫出発

象の一行

ふぁーん

と、いい

すると、

きどき立ち

ねさせて

いい匂い

所。街道近

「こまた

象の背中

「なにが、

小舳田（おだ）が

「さけ、さ

その言葉

「ぷぉーい

と、象が

る。いま

ときは、

があった。

せてやった